

## 5 間質性膀胱炎の患者に対する漢方による治療経験

長崎大学病院 泌尿器科・腎移植外科

松尾 朋博、光成 健輔、大庭 康司郎、今村 亮一

### 【はじめに】

間質性膀胱炎は、「膀胱の非特異的な慢性炎症を伴い、頻尿・尿意亢進・尿意切迫感・膀胱痛などの症状を呈する疾患」と定義されている。その原因は不明で、膀胱粘膜の機能障害や免疫学的機序が想定されている。確立した治療法はなく、疼痛に関しては対症的に鎮痛薬などの投与が試みられることも多いが、治療に難渋する患者も多い。一方で、漢方薬である抑肝散は、認知症の周辺症状だけではなく、さまざまな機序により臨床的にも神経障害性疼痛に対して効果を発揮し、さらに疼痛閾値を増加させ、かつ抗ストレス作用も持ち合わせている。

今回、著明な疼痛を伴う間質性膀胱炎に対して抑肝散を使用し、比較的良好な経過をたどった症例について報告する。

**【症例1】**68歳女性。頻尿および膀胱部痛があり、近医産婦人科を受診。過活動膀胱との診断のもと、抗コリン薬内服で経過観察されるも軽快なく、当科紹介となった。当科受診時、蓄尿時痛が著明であったため膀胱鏡を施行すると、ハンナ病変を伴う間質性膀胱炎が疑われる所見であった。そこで、膀胱生検術および膀胱水圧拡張術を施行した。ハンナ病変に関しては電気焼灼術を行った。手術3か月後、明らかなハンナ病変は認めなかったが膀胱部痛の再発をみとめ、鎮痛剤を投与するも軽快がなかった。そこで、抑肝散(TJ-54、7.5g分3食前)を処方したところ、痛みの評価スケール(NRS)が8から2へ著明に低下した。経過中、内服薬による有害事象は認めなかった。

### 【症例2】

63歳女性。前医にて間質性膀胱炎の診断を受け、スプラタストシル酸塩による加療を受けていたが効果なく当科紹介となった。蓄尿時痛も著明で、鎮痛薬によるコントロールも不良であった。そこで、当院で膀胱鏡を再度施行したところハンナ病変を認めたため、膀胱生検および膀胱水圧拡張術、さらにハンナ病変に対しては電気焼灼術を施行。手術後7か月間は軽快していたが、徐々に蓄尿時痛(NRS: 7)が再発した。鎮痛薬にてNRS 3程度まで改善したが、さらなる症状の軽快を期待し、抑肝散を処方した。その後、速やかに鎮痛効果見られ、現在も内服継続中である。

### 【考察】

間質性膀胱炎の患者に対しても漢方薬が効果を発揮する場面もあると考えられる。